

改訂第4版の序

がん化学療法は、入院から外来への移行がますます進んでいます。今後は一部のがん化学療法を除いて多くの抗がん剤による治療は病院の外来で行われるか、経口の抗がん剤によって行われるようになって予想されます。患者さんの日常生活や仕事などの社会生活の維持や経済的負担の軽減など、外来での治療は多くのメリットがありますが、一方で、病状の急変、副作用の発生などへの自力での対応、それらへの患者の不安などデメリットも多いのも事実です。そのため、外来化学療法はいかに安全に治療を行い、どのように治療効果を高めるかが求められることになります。帰宅後に起こる副作用の発生防止や発生した副作用の軽減のために、治療内容の検討や患者への説明・指導、支持療法薬の準備が適切に行われることが重要です。

第3版から2年が経過した本書の第4版の改訂にあたって、新規抗がん剤の発売やがん診療ガイドラインの改訂に伴い、新規レジメンの追加・変更を積極的に行いました。また、各章の冒頭のがん化学療法の全体像と治療の流れを理解するため、化学療法の概要やアルゴリズム等の図を掲載しました。さらには、要望の多かった有害事象共通用語基準（CTCAE）の一覧表を掲載し、直ちに有害事象のGradeを確認できるようにしました。

最近のがん薬物療法においては、学会や職能団体が認定した専門資格や認定資格を取得した医師・薬剤師・看護師などが中心となり、がん薬物療法の医療チームを結成し、より質の高いがん薬物療法を施行することにより、領域によっては治療成績の大幅な向上も図られています。今後は、病院におけるチーム医療だけでなく、地域の診療所などの医師や薬局の薬剤師なども含めたチーム医療の実現により、がん患者に最適ながん化学療法を安全に実施し、患者に安心してがん治療に取り組んでもらえるものと信じています。

本書は、薬剤師によって執筆された、がん化学療法について詳細に書かれた一冊です。病院や薬局の薬剤師（実習中の薬学生も）はもちろんのこと、医師や看護師の方々にも気軽に手に取っていただける本当のハンドブックとなることを願っています。

2015年2月

日本臨床腫瘍薬学会 理事長
日本病院薬剤師会 専務理事
遠藤 一司